

改めて「地元」と向き合う意味を問う —中島准教授インタビュー—

Can You Introduce Your Hometown?

text_TAJIMA/M1

夏休みに入り、思い思いの時間を過ごす8月。故郷へと帰省する方も多いのではない。幼少のころから過ごしてきたまち、全てを知っているように見えて、実は知らなかったことがたくさん眠っている。都市工学科に入り、「まちの見方」を学んできた今だからこその故郷の魅力というものがあるはずだ。今回は「地元を研究する」というテーマで、ご自身も故郷をテーマに卒業論文を執筆された中島直人准教授へのインタビュー取材を行った。

自分の“核”、あるいは“根っこ”をつくる、それが都市デザインに関わるうえで重要ではないか。

地元がすべての原点だった

> 先生は小学5年まで住んでいた杉並区の善福寺を卒業論文のテーマに選んでいます、自身の卒論を振り返っていかがですか。

善福寺を扱いたいということは最初から考えていて、初回の卒論会議から善福寺の話を出していた。ただ当初は設計にするか論文にするかとか、どのような内容にするかは決まっていなかったで、卒論会議を重ねるなかで方向性を固めていった。11月あたりには、建物が変わりゆくなかでずっと変わらない存在として屋敷の高木があることに着目して樹木の保存や眺望の保全をテーマにした設計をしようと決めた。だが結局この構想はなくなり最終的に論文に落ち着いた。というのも、調査を進めてゆくに、風致協会という団体の存在が浮かび上がってきたからだ。私が幼いときに楽しんでいた貸しポートや盆踊りなどのイベントはこの風致協会の活動であった。もともとあった良好なまちがこうした団体によって長い期間マネジメントされていたことが重要だったのだ、ということを実感したのが卒業論文の趣旨になる。今振り返ってみると、卒論を通して自分が生まれ育った地元のことを初めて都市計画的な視点で見ることができたし、自分の“核”をつくったような気がした。風致協会の方に地元の昔の資料をいろいろと見せてもらうなどして楽しかったね。

> 地元である善福寺を扱うことを決めた経緯は何だったのでしょうか。

都市に興味を持ったきっかけや都市工に進学した背景に善福寺があって、昔からこのまちが面白いと思っていた。小学生の頃は、新旧のまちの写真を比較しては「昔ここに杉の木があったんだ」といったことを知るのが好きだったし、都市工進学後に機会があったこの地に再び足を運んでみた時にも、自分が生まれ育ったこのまちがやっぱりいいな感じていたんだよね。他方、越沢明先生の本で善福寺の話題を目にしたたり、西村先生の都市デザイン概論の講義で井荻の区画整理の話のうへでも面白そうだと感じたので、地元をテーマに選ぶことにした。



善福寺池(左)と善福寺池へと下る坂道(右)

> 先生は当初から地元をテーマとして扱うことに強いこだわりを持っていたようですが、どういう点に地元を扱う意義を感じていたのでしょうか。

自分の“核”、あるいは“根っこ”をつくるということだと思ふ。

人はいろいろなまちを評価するとき、自分の育ったまちやそこでの体験との比較をしたうえで判断を行っ

ている。だがそれはたいていブラックボックスになっているので、まずは自分のことをしっかりと見つめてそのブラックボックスを明らかにすることが今後都市デザインに関わってゆくうえで重要ではないか。このようなことを最初の卒論会議のときに横文彦さんの言葉を借りながら主張していたのだが、地元を知らないというのはいわば根無し草のような状態であり、そのような人間でいては、将来いろんなまちに関わって地元のことを想っている人たちを相手に議論や提案をしようとしたときに信用など得られないのではないかとこの思いがあった。

学術的意味づけと地元への還元

> 地元を見るのは面白いですが、一方で、研究でいざ地元を扱うとなると、学術的な価値をどう見出すかが問われると思います。その点はどのように乗り越えれば良いでしょうか。

自身のブラックボックスを明らかにするとか、根っこをつくるというのはあくまで自分のなかでの目的にすぎないので、研究としてはそれだけでは満足できないところは確かにある。卒論だとまだそれで許されるけれども、修士にもなると学術的な意味づけはやっぱり求められてくるね。

地元からどうやって普遍的なものを導き出すかは結構難しい問題だけど、見る側の視点や洞察次第で見いだすことができるものもある。たとえば僕が慶応時代に扱っていた藤沢では、これまで都市計画の文脈で語られることのなかった391街区という場所から普遍的価値を見出すことはできたと思っているし、必ずしもまちが特別だからできる、特別じゃないからできない、というわけでもない。



> 学術的な価値を見出すことのほかに、研究で地元を扱う際に意識しなければならない点がありますか。

論文、設計を問わず、成果を地元に還元することは、とても大事だと思う。とりわけ、学会発表などの場がない設計を選択した場合だと、社会還元の道は地元との直接的なコンタクトに限られてくる。地元への還元についていえば、研究室OBで三国プロジェクトがお世話になっている倉橋さんが1つの理想形かもしれない。彼は地元をテーマに設計提案を行って、その後も地元に関わり続けていたことが今の三国のまちづくりにつながっている。あそこまではできなくとも、せめて地元に飛び込んで行って論文や設計の成果を発表することくらいはできるといいね。

地元に根ざす意味とは

> 先生は今もなお杉並など自身の住んでいた地元に深く関わっていますが、現在は地元を扱うということに



地元である杉並区善福寺周辺を卒業論文のテーマに取り上げた中島先生。最初の卒論会議のレジュメに、地元を扱うことに対する意気込みが綴られている。

個人個人が持つ記憶の中で、幼少の頃に遭遇し培われたある種の空間体験が、実は彼にとって良い<まち>あるいは住みにくい<まち>の評価を行うときに決定的な要因になるのではという仮説——人間とは、実は単に<見る>とか<使う>ということだけでなく、物的環境からある種の記憶を絶えず発見しようとしているのではないかと(横文彦)。私が、私のこれからの人生において、都市デザインに積極的に関わってゆける幸運を得るとしたら、またそのように本当に望むのならば、いわゆる原風景の多くと密接に関わるまち、心象空間としての<ふるさと>であるまちを、都市デザインという視点でこの時期に(一番最初に)論じ、自分なりの整理をしておくことが必要ではないかと思う。杉並、井荻、善福寺、そして奥深い自分自身、まず、ここから始めたい。

<中島先生 第1回卒論会議レジュメより>

ついでにどのように考えていますか。

これまで杉並以外にも、先に挙げた藤沢や文京区の湯立坂など、自分の住んでいた「地元」を扱ってきたが、やっぱり地元に何かをするというのは自分が関わる必然性を感じるから、ひとしおやる気が出る。地元ばかりを扱ってはいは社会的な問題に答えきれないだろうと思う一方、社会性をまとう以前の、その人の生活や人生の履歴がたつてくる人格的な研究ほど面白いものはない。もちろん人それぞれ考え方があって、あえて自分が身を置いたことのない海外の都市を扱うのはそれはそれで面白いことがある。ただ、いずれにせよいろいろなまちに関わっていると自分の出身について訊かれることは多くて、そのときに地元のことがい自信をもって滔々と語れるべきだと思う。都市計画家にとって、自分がこだわられるまちを持つというのは必須だし、まちあるきの案内が出来るまちがいくつあるかというのは1つのパラメーターになってくる。そういう意味で、自分の住んでいる地元を見るということはまず大事だし、いろんなところに住んでそれぞれのまちを詳しく知るという経験もまた大事なことだと思います。■

知っていたのに知らないなんて ー私の地元探訪記ー

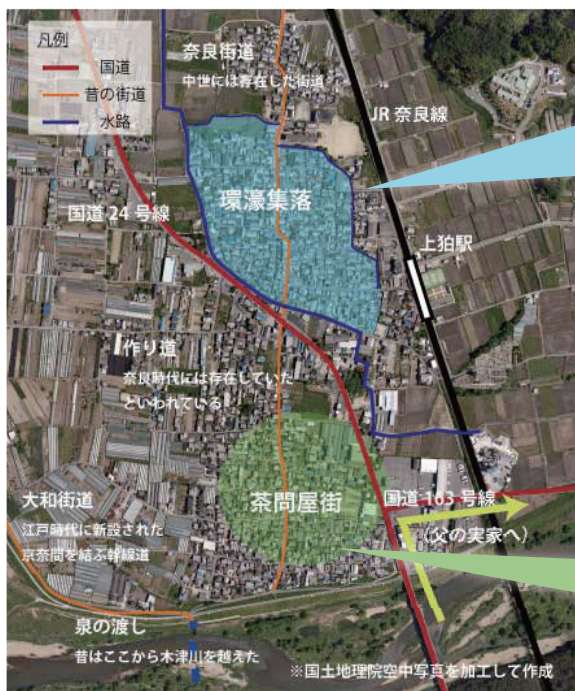
Once I Lived, but I didn't Know There.

text_TAJIMA/MI

「こんな所にそんな歴史があったのか！」去年の夏、木津川市の上粕という場所で茶問屋街が形成されていることを知った。そこは以前住んでいた場所の近くで、いつも祖父の家へ行く時には国道沿いから必ず目にしていたはずの場所だった。しかし今まで私はその場所をただの農村とばかり思っていた。出身地の近い友人も、生まれの近い父親も、勿論私も、そのまちが面白いことに気付いていなかった。自分がかつていた町を語れないなんて。中島先生のインタビューを経て、このままではいけないと思った私は、まちの歴史を学んだうえでそこを訪れることとした。

今回訪れた場所：京都府木津川市上粕地区

京都府の最南端に位置する街。奈良と京都という2つの都に近いこともあり古くから街道沿いの集落として存在、741年にはこの地に都（恭仁京）を移そうという計画も存在していた。かつては木津川の水運と京都・奈良間を結ぶ街道、現在では国道24号線、163号線の2本の道路が通っており、交通の要所としての性格が残っている。元は木津、加茂、山城の3町で構成されていたのが合併して一つの市になった。私が住んでいたのは旧木津、この場所は山城にあたるため、今までは近くを通っても「ありがちな田舎」程度にしかならなかった。よって、私が知っているこのまちの姿は、国道沿いから見た風景だけであったのだ。



中世より続く環濠集落

上粕の北側には室町時代に形成された環濠集落が存在する。この地に古くから居住していた粕氏の居城を中心に形成されたと考えられている。防御の為に環濠は、江戸時代以降に農業用水へと転用されたことにより今まで残ってきた。今でも狭い道が張り巡らされた昔の町割りやかつての井戸跡が残っており、また建物も塀と門を有した立派なものが多く、昔のまちの繁栄を感じることができる。



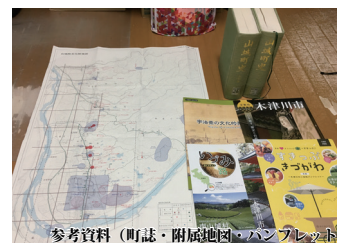
幕末に発展した茶問屋街

上粕の南側では、宇治や和束といった茶の産地に囲まれていて、幕末から明治時代には採れた茶を木津川の水運で神戸港に運び、外国へ出荷していく茶問屋業が盛んに見られた。伊右衛門で有名な福寿園を初めとして現在も40件近く茶業関係の施設が残っている。近年の日本茶ブームに乗り、観光地街道を「茶問屋ストリート」と名付けて観光資源化する取り組みが見られるが、施設が点在しているなど課題は多く感じた。



一経験と知識を繋ぐことが”核”をつくる

私がこのまちに住んでいた頃はニュータウンの側に住んでいたこともあり、ここに残る歴史性に思いを馳せることがなかった。しかし今回、まちの歴史を学び新たにこの地域を見直したことで、奈良時代から蓄積されてきた文脈が今でも残っていることがわかり、非常に驚かされたし、非常に面白かった。今まで気に留めなかった場所へ興味を持ったこと、それは私がこの学科、この研究室にきてまちの歴史を読むことの奥深さを学んだからだろう。知っている場所の形成を語れるようになること、このことは自分の今の関心である歴史的市街地を見ていく際にも大事なことだと思う。木津川のまちには沢山の歴史がまだ眠っている。地元の歴史を学び、自分の経験とまちの知識を結び付けることで”核”がつくられるのだろうか。その思った今回の取材だった。



Information

Archives - 8月のweb記事



08.03 高島平ヘリテージ MTG
新メンバーも加えて行われた「ヘリテージミーティング」は前回に劣らない白熱っぷり。M2 田中が報告する。



08.03 上野スクエア会議・検討委員会！
頑張って作った「攻めた」提案の反応や如何に！活発な議論飛び交う検討委員会の様子を M1 中戸が報告する。



08.11 三国 建物歴史ヒアリング調査
三国の空き家発生メカニズムを解明すべく、建物継承に関するヒアリングを集中的に実施。M2 神谷からの報告。



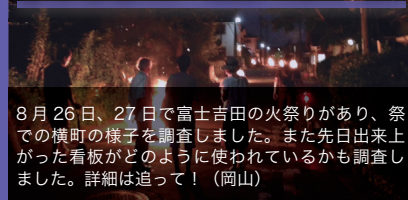
08.26 内子調査第2弾
これまでの成果を現地へ還元したり、個性豊かな人々との出会ったり、密度の濃い現地調査を M1 清水が報告。

Project Headlines -PJ 近況早わかり-

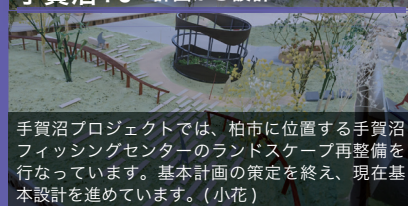
Web 記事でもご覧ください。http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

Hey listen, -ちょっと聞いて！

富士吉田 PJ 【速報】火祭り、盛況。



手賀沼 PJ 計画から設計へ...



9月の予定

- 8/31-9/3 建築学会大会@広島
- 9/4-13 カトマンス現地調査
- 9/12 高島平ヘリテージMTG
- 9/26 第6回研究室会議
- 9/27 上野 PJ 地元協議会

編集後記

インターンに向かう途中、「お茶の京都」をという企画を発見。地元をテーマにしていたこのタイミングで出会えたのは奇跡に近く、見つけた時はすごく嬉しかった。そういえば8月は高島平・三国・内子の各プロジェクトでそれぞれ調査やイベントがあり、その全てで地元の人と関わる機会が多かった。高島平では地区の歴史について熱く語り合い、三国ではそれぞれの家と家族の歴史に触れ、内子では街の将来について皆で思いを馳せた。彼らの地元愛と比べれば小さいかもしれないが、私も育ってきたまちが好きなんだと思った。(但馬)

